

出産直後から産後3ヶ月までの母親の対児愛着について

— PBI (Post-partum Bonding Instrument) 日本語版及び母親の対児愛着に関連する要因の検討 —

雑 賀 美希子

1 問題と目的

母親は子どもに対する愛着を感じることによって育児行動に動機づけられるが、子どもに愛着 (bonding) を持たない母親が問題となり Brockington (2001) は母子関係障害 (bonding disorder) と呼んでいる。Post-partum Bonding Instrument (以下PBIとする) は Brockingtonら (2001) が開発した初期の母子関係の障害のスクリーニングテストである。6件法 (0-5点で換算, 得点が高いほど母子関係障害の危険度が高い) で25項目4つの下位尺度 (否定的感情, 拒否, 不安, 虐待) からなる。本研究ではPBI日本語版を制作し信頼性と妥当性を検討することの一つの目的とする。PBIを母親の自分の子どもに対する愛着の指標とし, 一般の母親を対象として実施する。愛着に関連する要因として妊娠に対する態度 (大日向, 1988, Robson, 1970; Robson, 1980), 出産の苦痛 (RobsonとKumarら, 1980), 社会的サポートおよびパートナーとの関係 (Murrayら1996), 子どもの気質 (Murrayら1996), 抑うつ (Nagata et al, 2000) が指摘されるが実証的研究は少ない。出産直後, 出産1ヶ月後, 出産3ヶ月後と縦断調査を行い愛着 (bonding) と関連する要因を検討することを第二の目的とする。そして, 第三の目的として出産直後, 産後1ヶ月, 産後3ヶ月の3時点で愛着がどのように変化したのか, また愛着と関連がみられた要因が調査を実施した時点以外の愛着とではどう関連しているのか検討を行う。

2 方法

3病院で出産直後の母親を対象に調査を実施 (回答数133)。さらに産後1ヶ月 (回答数74), 産後3ヶ月 (回答数67) に郵送法で追跡調査を実施した。3回全ての調査の回答者は48名だった。出産直後の調査内容はデモグラフィック項目, 新生児について, 妊娠・出産について, PBI日本語版, 抑うつ (EPDS; 岡野ら1996), 産褥期愛着尺度 (Nagata et al.2000), MAI日本語版 (Muller, 1994; 辻野ら2000), 再検査用PBI (項目の順序を変えて翌日実施) である。産後1ヶ月の調査項目はデモグラフィック項目, 育児サポート状況, PBI日本語版, EPDS, 夫婦関係満足尺度 (諸井 1996), ソーシャルサポート: SSSQ6 (Sarason, Sarason, Shearin & Pierce, 1987): SSSQ (満足度) SS

QN (数), 産後3ヶ月の調査項目はPBI日本語版, EPDS, 乳児の気質, 乳児の反応である。

3 結果と考察

出産直後調査でPBI日本語版の信頼性と妥当性の検討を行った。一因子が想定され全項目によるクロンバックの α 係数は.83と高い内的整合性が示された。再検査信頼性を検討するためPBIと再検査用PBIの相関係数を算出したところ $r=.87$ ($p<0.01$) と高くPBI日本語版は高い信頼性が示された。また愛着の質問紙であるMAI日本語版 ($r=-.70$ $p<0.01$), 産褥期愛着尺度の2つの尺度との間で, ($r=-.63$ $p<0.01$, $r=.27$ $p<0.05$) でそれぞれ想定どおりの相関が見いだされ, 併存的妥当性が示された。また, PBIは抑うつとの間で1%水準で有意な相関があり ($r=.28$), 構成概念妥当性を支持する結果だった。

出産直後の愛着と関連要因についてt検定で検討した。妊娠願望の有無が (PBI全体得点以下B得点とする $t=-2.86$, $p<0.05$ 否定的感情 $t=-2.41$ $p<0.05$) 有意差を持ち, 妊娠を望んでいなかった母親の方が有意に得点が高かった。拒否については, 母親の出産経験で5%水準の有意差があり ($t=-2.21$ $p<0.05$), 経産婦の方が有意に得点が高かった。不安はつわりの有無で5%水準の有意差がみられ ($t=-2.27$ $p<0.05$) つわりのあった母親の方が有意に高かった。また相関分析では, 抑うつ (B得点 $r=.28$ $p<0.01$, 拒否: $r=.19$ $p<0.05$, 不安: $r=.34$ $p<0.01$), 妊娠時の母親の反応 (B得点 $r=.19$ $p<0.05$), 妊娠に対する父親の反応 (B得点 $r=.33$ $p<0.01$, 否定的感情 $r=.28$ $p<0.01$, 拒否 $r=.22$ $p<0.01$), 出産時の父親の反応 (B得点 $r=.26$ $p<0.01$, 否定的感情 $r=.24$ $p<0.01$, 拒否 $r=.28$ $p<0.01$), 出産時の母親の気持 (B得点 $r=.20$ $p<0.05$, 否定的感情 $r=.23$ $p<0.01$, 拒否 $r=.19$ $p<0.05$) が有意だった。愛着得点を従属変数, 関連要因を独立変数としてステップワイズ法の重回帰分析を行ったところ, B得点は妊娠時の父親の反応と抑うつ, 否定的感情は, 妊娠時の父親の反応と出産時の母親の気持, 拒否は, 妊娠時の父親の反応と母親の年齢, 不安は, 抑うつが説明変数として抽出された。

産後1ヶ月の愛着と関連要因の相関を検討したところ, 育児相談相手 (B得点 $r=-.25$ $p<0.05$, 否定的感情

$r = -.26$ $p < 0.05$), 育児手助け (否定的感情 $r = -.25$ $p < 0.05$, 拒否 $r = -.27$ $p < 0.05$), ソーシャルサポートの満足度 (B得点 $r = -.26$ $p < 0.05$, 否定的感情 $r = -.25$ $p < 0.05$), 抑うつ (B得点 $r = .42$ $p < 0.01$, 否定的感情 $r = .38$ $p < 0.01$, 拒否 $r = .25$ $p < 0.05$, 不安 $r = .47$ $p < 0.01$) が有意だった。ステップワイズ法により愛着得点を従属変数, 関連要因を独立変数として重回帰分析を行った結果, B得点, 否定的感情, 拒否は抑うつと育児の手助けの人数が, 不安については抑うつが説明変数として抽出された。

産後3ヶ月の愛着と関連要因については, t検定で子どもの扱いやすさ (B得点 $t = -3.04$ $p < 0.01$, 否定的感情 $t = -2.51$ $p < 0.05$, 拒否 $t = -2.01$ $p < 0.05$, 不安 $t = -3.01$ $p < 0.01$) が有意差をもち, 母親が子どもを扱いやすいと感じている方がそうでない母親よりも有意に得点が低かった。また子どもが母親を識別していると感じているかでB得点で5%水準の有意差 ($t = -2.14$ $p < 0.05$) があり子どもが母親を識別していると感じている母親の方が有意に得点が低かった。相関分析では抑うつ (B得点 $r = .49$ $p < 0.01$, 否定的感情 $r = .45$ $p < 0.01$, 拒否 $r = .33$ $p < 0.01$, 不安 $r = .44$ $p < 0.01$), 子どもの気むずかしさ (B得点 $r = .50$ $p < 0.01$, 否定的感情 $r = .42$ $p < 0.01$, 拒否 $r = .32$ $p < 0.01$, 不安 $r = .57$ $p < 0.01$) が愛着との間で有意な相関がみられた。また, 抑うつと気むずかしさの間には有意な相関はみられなかった ($r = .15$ ns)。抑うつと気むずかしさはそれぞれ独立に愛着に影響を与えているようだ。

出産直後, 産後1ヶ月, 3ヶ月で愛着が変化するかを調べるために分散分析をした。B得点は10%の傾向だった ($F = 2.60$ $df 2, 84$ $p = 0.09$ ns)。下位尺度では否定的感情は $F = 3.43$ $df (2, 80)$ と5%水準で有意で多重比較により出産直後と産後1ヶ月の間および産後1ヶ月と産後3ヶ月の間で5%水準で有意差があった。否定的感情は産後1ヶ月で上昇し3ヶ月で下がるのがわかった。不安は $F = 6.50$ $df (2, 82)$ と1%水準で有意となり多重比較の結果, 出産直後と産後3ヶ月の間に5%水準, 産後1ヶ月と産後3ヶ月の間で1%水準の有意差があった。不安は出産直後と1ヶ月後は高く, 3ヶ月で下がるのがわかった。抑うつは $F = 8.12$ $df (2, 88)$ と1%水準で有意で多重比較の結果産後1ヶ月と産後3ヶ月の間に1%水準の有意差があった。出産直後と産後1ヶ月が高く, 産後3ヶ月で下がるのがわかる。母親の子どもに対する愛着は出産後の時間の経過で変化をすと言えよう。

産後3ヶ月時の子どもの扱いやすさ別に出産直後, 産後1ヶ月, 産後3ヶ月時のPBI得点とEPDS得点を検討した。愛着得点は出産直後は差は小さくその後差が大きくなる。EPDS得点は子どもが扱いやすいと答えた母親の方が一貫して低い。分散分析の結果否定的感情 ($F = 3.63$ $df 2, 78$) と不安 ($F = 5.79$ $df 2, 80$) で月齢の主効果が有意だったが扱いやすさの主効果, 交互作用はいずれも有意とならなかった。また母親の妊娠願望別に3時点のPBIの得点とEPDS得点を検討した。出産直後には, 妊娠を望んでいなかった者の方がPBI得点が高いが, 産後1ヶ月時に逆になり, 産後3ヶ月でも, 妊娠を望んでいた者の方がPBI得点が高い傾向がある。しかし不安で月齢の主効果が $F = 4.94$ $df (2, 80)$ 1%水準で有意, EPDS得点は, 月齢の主効果が $F = 5.00$ $df (2, 84)$ $p = 0.009$ と1%水準で有意になったが, 妊娠願望の主効果, 交互作用は有意にならなかった。

母親の年齢, 妊娠時の父親の反応, 育児サポート (相談相手, 手助け源), 夫婦関係, ソーシャルサポート, 子どもの気むずかしさ, 3時点の抑うつ, 3時点の愛着について相関を求めた。その結果, PBIの全ての得点が3時点を通じて有意な相関関係にあることが示された。また, B得点は出産直後は抑うつとの相関は有意ではなく, 産後1ヶ月, 3ヶ月のB得点は3時点の全ての抑うつと有意な相関があった。子どもの気むずかしさは産後1ヶ月 ($r = .44$) と3ヶ月のB得点 ($r = .50$) と1%水準で有意な相関があった。否定的感情も出産直後は抑うつと有意な相関はなく, 産後1ヶ月, 3ヶ月でいずれの時点の抑うつとも有意な相関があり, 子どもの気むずかしさは産後1ヶ月 ($r = .40$) 産後3ヶ月 ($r = .39$) に1%水準で有意な正の相関がみられた。拒否は産後1ヶ月時の同時期の抑うつと5%水準の有意な正の相関が見られ ($r = .33$ $p = .03$) 子どもの気むずかしさとの間に3ヶ月時に5%水準の有意な正の相関 ($r = .33$ $p = .03$) があった。不安は出産直後に同時期の抑うつと1%水準で有意な正の相関が見られ ($r = .48$), 産後1ヶ月, 産後3ヶ月ともいずれの時期の抑うつとの間で有意な正の相関がみられた。子どもの気むずかしさは3時点の不安と有意な正の相関関係にあった。出産直後の不安は, 妊娠時の父親の反応との間に5%水準で有意な正の相関がみられた ($r = .31$ $p = .05$)。出産直後の愛着には妊娠時の影響がありまた抑うつ, 子どもの気質の影響が少ないのに対し, 産後1ヶ月3ヶ月の愛着は抑うつと子どもの気質の影響が大きい。出産直後の愛着と産後時間が経過した後の愛着は異なると言える。